

# 「せんせい」

大分市 朝日 容子

私の参加する読書会で重松清著『せんせい。』を読んだ。教師と生徒をめぐる六つの物語である。大人になってからこそ分かる、当時先生が教えてくれたこと。時を経て心を通わせる教師と教え子など、端的な文体で平易に説き全ての作品が感動的に描かれている。

読書会でも先生との思い出話に花が咲いた。

「小学生の頃、先生が毎朝オルガンを弾きながら『はこべの歌』を歌ってくれた。優しい歌声に癒やされたのであろう。今でもはっきり覚えている」

と、その歌を披露する女性。

「あの先生がいたから今の私がある」

と涙を浮かべて話す人。先生から褒められたこと、叱られたこと、ほろ苦い思い出など年代に応じて様々な読後感が飛び交った。

私にもそんな先生がいた。

中学時代のS先生。新卒のちょっとシャイな熱血漢。顧問の野球部員には声を張り上げ檄を飛ばす。一方、生活ノートには綿密な観察力で生徒の行動を赤ペンで記す。私は帰宅するなり、このノートを開くのが楽しみだった。褒め言葉があると嬉しく、何度も読み返した。注意事項には必ず励ましの言葉が添えられていた。思い出深いノートだ。

月日が流れた。私は結婚して佐伯市に転居。その1ヶ月後、悪夢のような出来事が起きた。夫の運転する車で実家に向かう途中、交通事故に巻き込まれたのだ。飲酒運転のトラックが激しく追突、車は飛ばされ、川岸の道路標識を薙ぎ倒して止まった。私は頭部と頸椎を損傷、救急車で運ばれた。

新婚生活が一転。長い入院生活を余儀無くされたのである。初めて味わう大きな挫折であった。襲ってくる痛みと恐怖に悩まされる日々が続き、情緒不安定に陥った。

(何も落ち度のない私が何故、こんな苦しみを……)と煩悶した。ベッドの上だけの生活、次第に焦燥感に駆られ、自暴自棄になっていく。

入院生活も1ヶ月を過ぎたある日、病室の扉がガラッと開いた。S先生である。

「おう、どげえか？」

先生は当時のままの口調で話し掛けてきた。事故の様子を綿々と話す私に、しばらく耳を傾けて下さった先生は、こう言った。

「そうか、大変じゃったのう。でものう、あんととき命を落としたと思やあこん先は、おまけの人生じゃ。もう何も怖くはなかるう。ハッハッハッ」

先生は豪快に笑い飛ばした。

(そうか。考え方ひとつで変化できるのだ) 私はあの事故を振り返った。もし川岸の道路標識が立っていなければ、真下を流れる川に落ちたはずだ。危機一髪だった。道路標識に救われたのだ。そして今、先生の言葉にも救われた。心の有りようで前向きになれることを。

「なんも焦ることはねえぞ、じゃあな」

先生は軽く手を上げ、病室を後にされた。それから「おまけの人生」だと思つと、気持ちがすっかり楽になり懸命にリハビリに励んだ。

入院生活を終えた私は、次第に色々なことに挑戦する意欲も湧いてきた。子育てをしながら自宅で塾を開き、36歳のときに市の読書会に参加。月に1冊、課題の文学書を読み読後感を話し合う。読破した本は350冊を越えた。その後、書くことの喜びも覚え拙いながらも紀行文を出版した。更に、朗読の楽しさも知るようになった。

60歳を過ぎた頃から母の介護が始まり、一時は私自身も体調を崩したこともあったが、今は母を介護できる幸せを覚えながらやっている。今思えば、あの事故の大きな挫折、その後の様々な苦難も、自らの成長のときと考えられるようになった。S先生のおかげだ。

読書会の課題書『せんせい。』を読み、読後感を話し合うことで恩師の言葉が鮮やかに蘇った。改めて本の力と言葉の力を認識させられた。大人になってからも「先生」に学んだのである。

やがて私は古希を迎える。同窓会で先生とお会いできたら、この話をしてみよう。

先生は覚えておられるだろうか。